

## 海外舞踊文献紹介

1995年以降に刊行された舞踊の理論的研究書の一部を紹介する。

Francis Sparshott, *A Measured Pace: Toward a Philosophical Understanding of the Arts of Dance*, Toronto: University of Toronto Press, 1995

哲学者スパーショットによる二冊目の舞踊論(一冊目は *Off the Ground: First Steps to a Philosophical Consideration of the Dance*, Princeton: Princeton University Press, 1988)。580ページの大著だが、内容は独自の説を展開するというより、舞踊を理論的あるいは哲学的に研究しようとする者が抑えておかねばならない論点を網羅的に紹介したもの。第一部「舞踊の種類」には分類の問題、コンテキストによる分類、ミメシス、表現、動きの形式原理、解剖学、単位とシステム、リズム、一と多、舞踊構成の様態の各章が、第二部「舞踊と関連分野」には舞踊と音楽、舞踊と言語、舞踊と演劇の各章が、第三部「舞踊の諸相」には舞踊の価値、踊り手と観客、舞踊の学習、舞踊と振付、舞踊のアイデンティティ、舞踊の記録の各章が含まれる。各章はさらに細分化されてさまざまな項目がたてられ、さながら舞踊研究百科のおもむきがある。

Ellen W. Goellner & Jacqueline Shea Murphy (eds.), *Bodies of the Text: Dance as Theory, Literature as Dance*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1995

ゲルナーはプリンストン大学の、マーフィーはバークレー大学の英文教員。最新流行の文学理論や文化研究の成果を舞踊研究に持ち込んだ論文を集めて一冊にしたアンソロジー。編者らによればダンスの稽古をしながら次のように考えたのがこの本の誕生のきっかけだったという。ジェンダー、セクシャリティ、大衆文化などの研究は文学理論を豊かにしたし、逆に文学理論(現代思想)はそれらの問題の考察に大きな武器を与えているのに、なぜ文学研究者達は舞踊を問題にしようとしなかったのか。舞踊の考察は文学理論を豊かにするに違いないし、また文学理論は舞踊研究に新しい視点を与えるはずだ、と。こうして現代的な問題意識に立ちながら舞踊をテキストとして扱う論文が集められたのだが、そのテーマはジェンダーあるいはセクシャリティにからんでいるものが多い。寄稿者の中にはジャック・デリダの名前もあるが、多くは実際にダンスを学んだ研究者である。

Helen Thomas, *Dance, Modernity & Culture: Explorations in the Sociology of Dance*, London: Routledge, 1995

アメリカのモダンダンスの発生と展開を社会的に考察した論考。舞踊を社会的文化的コンテキストの中の一現象としてとらえ、舞踊社会学の方法論を構築することを目指している。そのケーススタディとして、ロイ・フラー、イサドラ・ダンカン、ルース・セント・デニスらを取りあげるが、考察の大部分はマーサ・グラハムに割かれている。

Mark Franko, *Dancing Modernism/Performing Politics*, Bloomington: Indiana University Press, 1995

ダンカンからグラハムをへてカニングハムに至るアメリカのモダンダンスの歴史を、ニュー・アート・ヒストリーやフェミニズムの成果を応用して再考する。フランコの関心は舞踊と政治との関係にある。たとえば、ダンカンやグラハムのモダンダンスを単に表現主義というのではなく、その表現が性や階級の問題にどのような意義をもっていたかを探る。またモダニズムの内にあった政治的急進主義(グリーンバーグのモダニズム芸術理論がトロツキーらの政治理論と関連があったことは知られている)の舞踊への影響を調べる。さらに現代のエイズの問題からゲイの問題に触れ、逸脱するセクシャリティの事例としての大野一雄にまで筆は及ぶ。

Ramsay Burt, *The Male Dancer: Bodies, Spectacle, Sexualities*, London: Routledge, 1995

ついに出たというか、ジェンダー論やクイア論の盛んなアメリカの研究環境で出るべくして出た本。従来のフェミニズムの立場では、ダンスにおける身体はもっぱら男性の視線(male gaze)の対象としての女性ダンサーの身体が問題となっていたが、本書は男性ダンサーの身体を主題にしたものである。女性ダンサーの身体が「女らしさ」の体現を求められたように男性ダンサーにとっては「男らしさ」の体現が問題になる。西欧での「男らしさ」は暴力的でマッチョなイメージがある。しかし実際の舞踊ではこのイメージが強調されることもあれば否定されることもある。著者はニジンスキーからアメリカのモダンダンスやポストモダンダンス、そしてピナ・バウシュを素材にとって分析を進める(素材を西欧に限定し、日本の舞踏を排除したことについては、その位置づけが面倒であるという弁明をしている)。最後の章は「ポスト男性」と題され、最近の舞踊作品では

従来の男らしさの観念が解体されていることから、性についての新しい考え方が生まれる可能性を示唆している。

Amy Koritz, *Gendering Bodies/Performing Art : Dance and Literature in Early Twentieth-Century British Culture*, The University of Michigan Press, 1995

世紀末から1920年頃にかけてのイギリスにおけるダンスと文学の関係を探る。ダンスとしてはロンドンのミュージック・ホールからイサドラ・ダンカンそしてディアギレフのロシア・バレエなどが、文学者としてはオスカー・ワイルド、イェイツ、バーナード・ショー、エリオットなどがとり上げられる。基本的な視角は、最近のこの種の本の例にもれず、ジェンダーの問題にある。

Gay Morris (ed.), *Moving Words : Re-writing dance*, London : Routledge, 1996

近年アメリカでは多様な視点からの舞踊論が次々と書かれている。本書はそれら新しい舞踊論の傾向を概観する論文集である。背景にあるのは、フェミニズム、ポストコロニアリズム、文化研究などの流行である。本書で扱われているトピックの例をあげれば、舞台上の黒人男性の身体の表象、グラハムの作品における人権とジェンダー、「オリエンタル」ダンスの歴史的再考などがある。寄稿者は上で紹介した Franko, Thomas, Koritz などのほか、Marcia Siegel や Stephanie Jordan, Susan Manning, そして日本人 Miwa Nagura など18名。  
(尼ヶ崎 彬)

平成8年度 舞踊学関係修士論文題目一覧

修士論文題目	氏名	大学院名
・ 幼児の身体表現教育に関する基礎的研究	園山 順子	岡山大学大学院教育学研究科
・ 子供歌舞伎研究	小川 有子	お茶の水女子大学大学院
・ Susan Leigh Foster の舞踊研究における「修辭」の意味	酒向 治子	お茶の水女子大学大学院
・ クラシックバレエのポジションにおけるEMG及び重心の水平移動解析	杉本 亮子	お茶の水女子大学大学院
・ バレエ・リュス作品の構造比較研究～主要三作品を中心に～	高成麻畝子	お茶の水女子大学大学院
・ 姿勢調節と身体諸機能に及ぼす Feldenkrais Method の影響	毛利有紀子	お茶の水女子大学大学院
・ 児童舞踊における“童心”の概念研究	畦山恵理子	お茶の水女子大学大学院
・ レオス・カラックスの映画作品における舞踊的イメージ	鹿島 聖子	お茶の水女子大学大学院
・ G. I. グルジェフの the movements —「人間の調和的発達のための舞踊」に関する考察—	平田 友子	お茶の水女子大学大学院
・ 舞踊課題学習が中学生の対人意識に及ぼす影響	平尾 明子	神戸大学大学院教育学研究科
・ 舞踊における「即興」の本質と教育的展望	長谷川敬子	上越教育大学大学院
・ 芸術活動における舞踊の状況に関する研究—台湾と日本の比較を中心に—	張 碧玲	筑波大学大学院体育研究科
・ 現代社会における舞台芸術の方向性に関する研究—L 劇場（ニューヨーク）におけるモダンダンス「G」公演を事例として—	寺山 由美	筑波大学大学院体育研究科
・ 舞踊の空間類型に関する一考察	南 奈水子	筑波大学大学院体育研究科
・ 舞踊鑑賞におけるコミュニケーションについての一考察	西森 珠貴	筑波大学大学院体育研究科
・ 舞踊作品と音の効果に関する研究—電子楽器「ミブリー3」を用いて—	唐沢 優江	筑波大学大学院体育研究科
・ 学校教育における韓国舞踊の位置づけについて	尹 五峰	筑波大学大学院体育研究科
・ マーサ・グレアムの作品と動きに関する研究	潘 麗	東京学芸大学大学院
・ コンテンポラリーダンスにおけるテーマと動きの研究	薄 玫	東京学芸大学大学院
・ 西洋から見た日本の舞踊—幕末より昭和初期にかけて—	高崎 理子	日本大学大学院芸術学研究科
・ 歌舞伎史に於ける「衣裳」の役割	石田久美子	日本大学大学院芸術学研究科
・ 「あやめぐさ」と「花」「実」	酒井 照子	日本大学大学院芸術学研究科
・ 岡倉士朗をめぐって—「演出者」の存在を考える—	小柳 和男	日本大学大学院芸術学研究科
・ 保健体育「ダンス」領域における琉球舞踊の教材化に関する研究—男踊「鳩間節」の教材化及び検証—	島袋 君子	琉球大学大学院教育学研究科

(以上、平成9年7月31日までにご回答いただいた該当論文を掲載した。)